平和への願いを込めて

～小・中学生平和作文コンクール入賞作品発表～

市では、子どもたちの平和に対する思いや考えを発表する「小・中学生平和作文コンクール」を毎年実施しています。今年度は、小・中学校から82作品の応募があり、審査の結果、最優秀賞として小学生の部では池月小学校6年大沼逸美さんの「平和な時代に生まれなかったら」が、中学生の部では古川南中学校1年髙橋亮介さんの「平和について思うこと」が選ばれました。今回は、最優秀賞に輝いた2つの作品を紹介します。

問　政策課政策企画担当　☎23-2129

★小学生の部　最優秀賞	
池月小学校6年　大沼 逸美さん	平和な時代に生まれなかったら
★小学生の部　優秀賞	
古川第一小学校6年　髙橋 沙耶さん	今、平和？
古川第二小学校6年　大谷 一輝さん	平和への挑戦状
古川第四小学校5年　藤木 祐衣さん	私のしらない心のいたみ
古川第五小学校6年　佐々木 春菜さん	本当の幸せ

★中学生の部　最優秀賞	
古川南中学校1年　髙橋 亮介さん	平和について思うこと
★中学生の部　優秀賞	
古川西中学校3年　伊藤 英樹さん	平和
古川南中学校3年　佐々木 千夏さん	祖母の話から考えたこと

小学生の部　最優秀賞

平和な時代に生まれなかったら

池月小学校六年　大沼 逸美さん

ぼくが生まれた年は、平成十一年です。戦争は、もうずっと昔に終わっています。でも、もし戦争の時代に生まれていたら、どうなっていたでしょう。

学校で、原子爆弾の事を知りました。ぼくが住んでいる宮城県には落とされなかったけれど、広島県と長崎県に落とされて、たくさんの人が亡くなったそうです。建物が跡形もなく消えた街の写真も見ました。戦争から六十年以上もたった今では、街は昔以上にきれいになりましたが、そこに暮らす人の中には、まだ原爆症で苦しんでいる人がいるのだそうです。とても悲しい出来事です。

この戦争の時代の話を、おばあちゃんに聞きました。戦争の時代には、女の人は畑で食料を作り、男の人は十八才くらいになると、兵隊さんになって戦場に向かったのだそうです。自分から進んで兵隊さんになろうと思わなくても、国から「赤紙」というはがきがくると、強制的に兵隊さんにならなくてはなりませんでした。もし、「嫌だ。」と答えてしまうと、非国民と呼ばれ、ひどい扱いを受けたそうです。

「兵隊さんも、苦しくて、悲しい思いをした。」と、おばあちゃんは言っていました。ぼくはたとえ非国民と呼ばれても、「戦争に行かなくて良かった。」とほっとした家族もいたのだろうと思いました。

戦争が終わるころには、原爆が落ちたり、沖縄にアメリカ軍が上陸して激しい戦とうが続いたりしたそうです。「敵につかまるくらいなら…。」と、自害した人もいたそうです。沖縄県は、戦争が終わった後も、何十年もアメリカの支配を受けました。今でもアメリカ軍の基地があるそうです。沖縄県の戦争はまだ終わっていないように、ぼくは思います。

おばあちゃんに聞いた話の中で、ぼくが一番驚いたのは、特攻隊の話でした。特攻隊とは、敵に体当たりする飛行機の部隊のことです。片道分しか燃料を積まないので、死ぬつもりで出発しなければなりません。二十才前後の若い人が、飛行機に乗りこむことも多かったようです。

もっとやりたいことや、もっと楽しいことが、先にはあったはずなのに、何もできないまま死んでしまうのです。悲しく、戦争の悲さんさがこんなところからも想像できます。ぼくなら絶対に嫌だと思いました。戦争の時代には生まれたくないとも思いました。

しかし、おばあちゃんに聞いたような時代があり、乗り越えて、今の平和な時代があることも感じます。この時代に生まれてよかったと、今のくらしに感謝します。家族がいて、おいしくご飯を食べ、夢に向かって進めるということは、幸せなことです。

世界にはまだ兵器がたくさんあるそうです。世界中の平和を願うなら、兵器を捨て、争いをやめてほしいと思います。ぼくは兄弟げんかをしてしまうけれど、相手を傷つけ、ダメージを負わせるようなことはしません。それはお互いの心の底に、相手を思いやる気持ちがあるからだと思います。世界の本当の平和のために、みんなで考えたいことの一つだと思いました。

中学生の部　最優秀賞

平和について思うこと

古川南中学校一年　髙橋 亮介さん

今年、六十五回目の終戦記念日を迎えたことが、テレビなどで報道されていました。今日の日本は景気が悪く、様々な問題を抱えているものの、「平和」といえる範囲にあるでしょう。

歴史をさかのぼってみると、日本も諸外国のように戦争を繰り返してきました。その結果、多くのかけがえのない命や、美しい自然が奪われ、心には深い傷を負うことになりました。戦争や平和に関する多くの報道や番組を見て、今もなお、精神的、肉体的に苦しめられている多くの人々がいることを、私は知りました。私たちの気づかないところで、戦争の傷跡が六十五年たった今も、違う形で残されているのです。

今の私たちは、物質的に恵まれ、また、特に大きな不自由を感じることなく暮らしています。「平和」の意味を深く考えることなど、ないのではないかとさえ感じます。

しかし、私たちは忘れてはいけません。この暮らしは、かつての戦争によって失われた多くの命、そのほかに失われたかけがえのない多くのものの上に成り立っているのだということを。

でも、実際の私たちはどうでしょう。今のこの「平和」を、「幸せ」を、当たり前に思い、物を粗末にし、学ぶことをおこたり、ずるいことを考えたり、平気で人を傷つけたりと、どこか、人としての思いやり、優しさ、素直さ、物のありがたさを感じる心を、忘れがちではないでしょうか。というのも、平和の中にありながら、不幸な事件や出来事が、後を絶たないからです。

例えば、親子間での殺し合い、親が子を放置する、友を平気で傷つける、不当な金銭の動き、大人の世界のずるさ、政治のあり方などに、私は日々、疑問を感じます。

では、私たちは、今の日本を、いや、日本だけではない、その他の世界の多くの人々が、平和に暮らせるように、また、戦争で失われた多くのものを無駄にしないために、今後の日本を背負って立つ私たち中学生に、何ができるでしょうか。

私が考える始めの一歩。それは、物質的なものには恵まれていても、今、私たちが人として失いがちなものを取り戻すこと。そして親子の絆を深めること。家族との信頼関係を築くこと。友を大切にすること。常に心や体を鍛え、健康であること。勤勉さを忘れず、悪いことには背を向けること。ずるい気持ちを消すこと。決まりを守ること。自然を大切にすること。人としての優しさ、思いやり、素直さを忘れないこと。美しいものを愛する心を持つこと。弱い者を助ける…。

大人にはかなわないけれど、私たち中学生にもできることが、身近なところにたくさん転がっているような気がします。これを土台にし、様々なことを積み重ねていくことが、平和の礎となり、架け橋となることと私は思います。何事も基礎となるものがしっかりしていれば、そう簡単に崩れるものではないと思います。平和や幸せを常に考え、追求し、今後の世の中を担っていくに恥じない中学生でありたいと、私は思います。二度と悲惨な戦争が起こらず、戦争の悲惨さを後世にも伝え続けるとともに、平和な世の中であることを願っています。

髙橋副市長と受賞者の皆さん